ひろかだより

第403号
令和8年2月3日
発行
弘果
弘果 弘前中央青果株式会社
津軽のうまいがここにある

雪害対策に役立つアイテムは弘果物流まで
(株)弘果物流
☎0172-27-1800
菌源炭
(取扱商品の一例)

令和八年 初市

弘果、津軽りんご市場で1月5日、令和8年初市が行われました。各市場とも、生産者、買参人、関係者が多数来場し賑わい、消防団による纏振り、鏡開き、餅つき、つきたて餅の振る舞い等が行われ、新春のめでたい雰囲気の中、令和8年の取引が幕開けしました。

餅つき

纏振り

りんご

午前8時より行われたりんご初市には、1万3951箱（前年比195・1％）が上場され、生産者約500人、買参人約200人が来場しました。

この日の競売では「サンふじ」上実が高値1万8360円（前年比113・3％）、中値1万800円（同111・1％）、安値8640円（同100・0％）となりました。

會田一男専務は初市の取引と今後の見通しについて「初市の入荷数量は、前年が大雪の影響を受け極端に少なかったので、対比で倍近い数字となりました。令和7年産は雪害に始まり、猛暑や干ばつにより肥大が進まず、更には病害虫や鳥獣による被害等、苦難に見舞われた厳しい状況でした。これらを要因として、全体的に小玉傾向で、下位等級品の割合が多くなりましたが、生産者の努力で食味良く仕上がりました。今日の取引については、春節に向けての輸出需要から引き合いが強く、堅調な相場となりました。今後は他県産が終盤に入り、更に青森県産への引き合いが強まることから、他の果実との競合もありますが、堅調に相場が推移することを期待し、産地在庫の集荷や、無冷蔵品の早期販売を徹底していきたい」と話していました。

りんご初市【りんご競売】

青果

野菜、国産果実、輸入果実の初市が午前6時30分より行われました。

県内野菜は「葱」「ほうれん草」「せり」等の葉物や、「生椎茸」「牛蒡」等、県外野菜は「大根」「白菜」「キャベツ」の大型野菜や葉物類が順調な入荷となり取引されました。初市後も引き続き、県内外の産地からの入荷が順調に推移したことで、全体的に安定した単価で取引されました。

県内果実は「田舎館いちご」「シャインマスカット」「スチューベン」「ラ・フランス」の入荷、県外果実は栃木県産「いちご」、各産地の「みかん」等の柑橘類が入荷となり取引されました。初市後も県内果実は引き続き、「田舎館いちご」「シャインマスカット」「スチューベン」「ラ・フランス」中心の取引となりました。また県外果実は、各産地の「みかん」や「デコポン」等の中盤柑橘類、栃木、茨城県産「いちご」が中心の入荷、販売となりました。

輸入果実は、「バナナ」「パイン」「キウイ」が中心の取引となりました。初市後は多くの品目で、徐々に産地（輸出国）が切り替わりました。また、中国、台湾での春節需要による日本入荷への影響は少なく、順調な入荷となりました。

青果初市【そ菜競売】

津軽市場

午前8時より行われた津軽りんご市場初市には、5686箱（前年比199・3％）が上場され、生産者約530人、買参人約70人が来場しました。

この日の競売では「サンふじ」上実が高値1万7280円（同100・0％）、中値1万800円（同111・1％）、安値8640円（同100・0％）となりました。

齋藤彰寿取締役部長は初市の取引と今後の見通しについて「前年の初市は大雪の影響で、生産者の選果や出荷が進まず入荷が少ない状況でしたが、今年は例年並の入荷数量となりました。令和7年産は大雪、猛暑、干ばつ、病害虫発生、鳥獣害等、生産者の苦労が多い中でも、努力していただき食味良く仕上がりました。今日の取引は、昨年からの引き合いの強さを維持し、良いスタートとなりました。今後は、国内需要が中心となり、無冷蔵品の早期販売と冷蔵品への切り替えで品質を安定させ、相場が堅調に推移することを期待します」と話していました。

津軽りんご市場初市【りんご競売】

花き

午後12時30分より行われた初市では、「キク」「ユリ」「ラン」などの業務用の花をはじめ、「バラ」「カーネーション」等の洋花、「チューリップ」「スイートピー」等の季節商品が入荷となりました。低温の影響から切花全般に品薄となり、キク類等は全国的に引き合いが強く、単価高で取引されました。

花き業界では1月は、年間を通じて一番の閑散期ですが、「チューリップ」「フリージア」「サクラ」等の季節を先取りした春を感じさせる商材の入荷を強化し、順調な販売となりました。

花き初市【花き競売】

園地・ハウスの雪害対策をお願いいたします

今年も各地で積雪量が多くなっています。今後も引き続き気象情報に留意するとともに、左記の対策に努めてください。

☆雪が新しく軽いうちに、樹上の雪下ろしを行いましょう。

☆雪に埋もれた枝を掘り上げるか、枝先を抜き上げ、その下の雪を踏み固めましょう。なお、雪に埋まった枝の掘り上げが困難な場合は、下枝周辺を溝切りするかスコップで雪に切れ込みを入れ、積雪荷重の軽減に努めましょう。

☆剪定で除去する見込みの枝が雪中に埋もれている場合は、早めに切り取り、塗布剤を塗るなどして切り口を保護しましょう。

☆晴天が続く日を選んで融雪促進剤を散布しましょう。

☆野ネズミによる被害を防ぐため、幹の周りの雪を踏み固めましょう。食害が見られた場合は、被害の程度に応じて塗布剤を塗りましょう。

☆ハウスの雪下ろしや周囲の除雪を行い、ハウスへの被害を最小限にしましょう。

弘果物流では、雪害対策に役立つアイテムを用意しております。詳細は弘果物流にお問い合わせください。

(株)弘果物流
☎0172-27-1800

りんご無冷蔵品早期出荷のお願い

消費者の皆様へ鮮度の良いりんごをお届けするため、無冷蔵品は、早めの出荷をお願いいたします。

融雪剤 りんご用塗布剤 購入を助成します

☆対象者
弘果野菜、果実、りんご出荷者、津軽りんご市場出荷者（出荷組合員、一般出荷者問わず）

☆助成対象
弘果物流、津軽りんご市場から購入した対象資材

詳細は各産地担当者へお問い合わせください

弘果QR　津軽市場QR

高品質りんご剪定勉強会開催

弘果りんご連絡協議会では浪岡、平賀、中弘、高杉の4か所、津軽りんご市場連絡協議会では1か所、葉栄会では「大紅栄」の園地1か所を設け、それぞれ1月上旬に剪定勉強会が各地区で行われました。高品質なりんご生産に向けた剪定技術向上を目的に、各会場には多くの生産者が来場しました。

講師の実演を熱心に見入る参加者

勉強会では、講師が樹形の方向性や樹勢の調整、作業のしやすさなどを考慮しながら剪定を実演し、参加者は熱心に見入っていました。

また、昨今のりんご生産者の高齢化や人手不足により葉とらずふじが増えていることを受け、弘果りんご連絡協議会の各会場では、葉とらずふじの剪定も行われました。同協議会須藤惠司会長はこの取り組みについて「りんご作業従事者が減少する中、省力化に向けて取り組んでいかなければ園地及び生産量を維持できません。その一環として、今回は要望が多かった葉とらずの剪定も各会場で行いました。葉とらず栽培は通常栽培と枝の仕立て方も変わってきますので、講師の説明、実演を参考に取り組んでみてください」と話していました。

通常栽培の剪定とともに葉とらず栽培の剪定を熱心に聞いた参加者からは「講師の枝を切る基準が大変参考になりました。また、葉とらずの剪定では『葉とらず』と『葉とれず』の違いを理解しました。品質良く、かつ省力化に繋げられるように実践していきたいです」と話していました。

「農(のう)」の「業(わざ)」を継ぐ
期待の後継者

家業である「農業」に希望を見出し、夢に向け努力する期待の後継者を紹介します。

三上 玲央(れお)さん(27)

【園地所在地】板柳町石野
【作付状況】りんご・4.4ヘクタール、ぶどう・10アール
【就農年】2023年
【きっかけ】りんご農家に生まれ育ち、高校卒業後は大手のスポーツ用品店で働いていました。そして仕事の合間に、家業の手伝いを行っていました。そのような生活が続き、結婚、子供の誕生、成長と人生のステージが進んでいく中、将来のビジョンを思い描くようになりました。当時はコロナ禍で、あらゆる面において仕事に行き詰まっていた感があり、また家業のこれからのことを考えた際、りんご生産の将来性と、漠然と自分が継承していくであろうと考えていたことから、家族と話し合い意志を固め、本格的に就農しました。

【現在】就農のスタート時から、農業経営に必要なモノ（園地、機械、作業場所等）が揃っていましたので、恵まれた環境ではありました。しかし、その状況に甘える訳ではなく、父から栽培管理、農業経営について学び、地域の農業関係の研究会にも積極的に参加し、栽培技術向上に向けて情報共有、交換を行っています。縦（父）と横（研究会等）をつなぐことで、自身の農業スタイルを構築していきたいと考えています。

【夢・展望】家業の維持、発展を考えていく上で重要なことは、「質」の向上にあると考えています。りんごの商品性を高める品質の向上は勿論のこと、効率化や省力化等、作業の質を高めていくための機械、IT技術の導入、高密植栽培に代表される新しい栽培方法へのチャレンジ等、取り組んでいきたいことが多々あります。

【座右の銘】「死ぬこと以外かすり傷」死ぬこと以外で起こる失敗や困難は、命に別状のない「かすり傷」程度のものであり、大したことはなく、乗り越えられると考えています。この言葉から、失敗を恐れず挑戦し続ける姿勢や、困難を乗り越える強さを持ち、日々一生懸命励んでいます。

湧水が育む 津軽の伝統野菜 一町田せり

出荷に向け選別に励む工藤さん

弘前市一町田地区で栽培されるせりは、冬でも凍ることのない豊富な湧水を利用した、藩政時代から続くとされる津軽の伝統野菜で、「一町田せり」と呼ばれ親しまれています。

この「一町田せり」の知名度とブランド力の向上、生産力の確保を目的に、同地区の生産者で「一町田せりを守る会」が組織され、活動しています。

同会の工藤龍吉(りゅうきち)さんは、生育、品質について「私のせり田では、播種の時期や栽培管理を工夫することによって、天候の影響を受けにくくしています。現在収穫されているせりも長くて太く非常に出来が良いです」と話し、一町田せりの今後について「会名にもある『守る』ことを前向きに考えて、後継者育成の一環として、せりの栽培に興味がある方に、地域のせり田の紹介及び技術等を教えていきたいです。そして仲間を増やし、津軽の冬の風味を絶やすことなく繋いでいきたいです」と話していました。

収穫されたせりは、きれいに水洗いされ、梱包して市場に出荷されます。収穫作業は雪が降り積もる2月下旬頃まで続く予定です。

田舎館いちご 出荷ピークに向けて

品質・食味ともに良い仕上がりと話す白戸さん

田舎館いちご研究会が出荷するいちごは、「味」「品質」にとことんこだわって生産しています。現在は田舎館ご当地キャラクター「いち姫」がデザインされたパッケージをまとい、青森県内外へ「いちごの産地＝田舎館」「美味しいいちご＝田舎館産」を発信し続けています。

会長の白戸弘樹さんは3棟のハウス（約390坪）で、「とちおとめ」「ロイヤルクイーン」を栽培しています。今シーズンは、昨年11月下旬から収穫・出荷が始まり、12月中旬からの1回目のピークを経て現在に至ります。

白戸さんは今シーズンの状況について「近年は豪雪により、日照確保や倒壊防止のための除雪や、内部の温度管理のために加温機の稼働が増え、燃料費がかさむ等、ハウスの管理に苦心しています。ハウス管理や栽培管理を徹底した結果、いちごは品質、食味ともに良い仕上がりとなっています。1月下旬からは生産量が増加するので、2回目の収穫・出荷のピークに向けて、引き続き各種管理に努めていきます。また、『いち姫』パッケージも当会が生産しているいちごであるとの認識が定着しているので、是非ともお買い求めいただき、おいしく食べていただきたいです」と話していました。

栽培者大募集

ホクホク食感と濃厚な甘さ
栗こ南瓜

近年、高い評価を得て引き合いが強く、安定した価格で取引されています。
生育後半まで草勢が衰えないため、栽培管理が容易。
週に１度の作業なので、他品目の合間の作業が可能！

病害虫の影響を受けにくく、機械化で労力軽減が可能！
里芋

機械化が可能なので労力軽減が期待できるうえ、弘果では各種機械の貸し出しをサポート！
さまざまな気候や土壌条件に適応しやすい特性があります。

栽培・収穫・出荷・販売まで
弘果がサポートします！
お問い合わせはそ菜部またはりんご部農産指導課へ